

1. イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」 (8:12)
 - a. 光は私たちの日常生活に欠かせないものである。世の光であるというイエスの宣言もまさにその通りで、私たちが生きていくうえでイエスはなくてはならない存在である。
 - b. 光にはそれ自体に生命に対して作用する働きがある。ほとんどの生命体は光の存在なしでは死んでしまう。私たちが物を見る能力も光があるかないかに大きく関わってくる。光は私たちの体に生活のリズムを与え、私たちが住む世界に色を与える。光は生きていくうえで必要不可欠だけでなく、生活の質をも高めるものである。
 - c. イエスなしの日常生活は、自らを失敗者に仕立て上げるようなものである。光なしでは私たちは間違った方向に進み、間違ったことを信じ、本来神が与えてくださっているものよりも質の低いみじめな生活を送ることになる。
 - d. 文脈からは、姦淫の女を石打ちにする代わりにイエスのこの宣言がなされた。それには宗教指導者たちが女を連れて来て、モーセの律法を理由にイエスを試したという背景があった。彼らはみことばを利用し女に暗い運命をもたらし、その場に居合わせた罪のない人たちをもその暗闇に引きずり込もうとした。
 - e. イエスは状況を見通しみことばの正しい読み方をもってご自分は世の光であることを証明された。
 - f. このような出来事が毎日起くとは限らないが、私たちが日々行なう選択は少しずつ、ゆっくりと、生と死を分けるような結果へとつながっていく。世の光であるイエスなしの人生を選ぶことは、光なしで生きていかななくてはならないようなものである。
 - g. では、イエスの光に照らされながら生きるにはどうしたらよいだろうか。まずはみことばを知ることから始めるのが良いだろう。ただしみことばはたしかに私たちを神へと導いてくださるが、前述の姦淫の女の話で見たように、使われ方によっては私たちを迷わせることもある。もしみことばを学んでも神に近づけていないのなら、みことばがその役目をなしていないということである。
 - h. 実際的には、イエスを世の光として生きていくのに大切なことは先人が歩んだように歩むことである。神を生活の一部とする——すなわち神を自分の中に招き入れ、みことばを学び、絶えず祈り、クリスチャンの集まりである教会の一部となり、今神が自分に何をされようとしているかを見定め、寛容になり、憐れみ深くなり、惜しみなく与え、神を礼拝する。
2. そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。」 (8:13-16)
 - a. いつの時代にもイエスに反発する者は出てくる。ただしもしあなたが一度もイエスを世の光として受け入れていなければ、イエスの証言が真実かどうかはわからない。
 - b. イエスを世の光として人生を生きた人たちは、イエスが世の光であるという証を持って墓に入っている。